

グループ紹介

食事と楽しい語らいを

一人暮らし老人への食事サービス

〈食事サービス〉

昭和五十八年に発足。市の呼びかけに応えて、日頃からこうした活動と考えていた婦人たちが、民生委員の方たちを中心としてボランティアを募り、理解を示す人たちの協力を得て、軌道にのりました。

現在では五十代、六十代、七十代の会員が計八十名。地区ごとに分かれて、施設「駿河荘」及び「岩本園」とで作られた食事を、笑顔と楽しい語らいと共に毎週届けています。

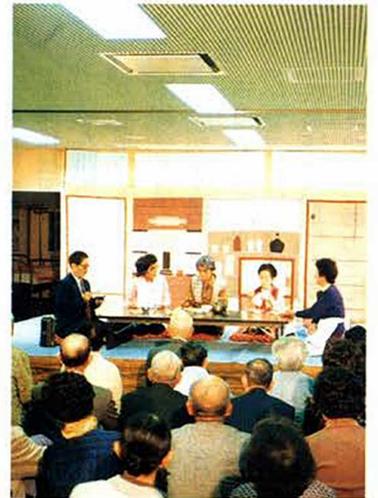
食事のおいしさもさることながら、何よりも、話し相手、時には悩み事の相談相手として、ひきこもりがちなお年寄りには心あたたまる存在となっています。

会員同士も連絡を密にとり合い、親睦をはかりながら、手作りの料理でお年寄りとの交流食事を催すなど、全市的な運動にしようと思ひ活動しています。

連絡先 富士市今泉八一六一五

電話 〇五四五(52)二四五一

代表者 小林糸子



演劇を通して老人問題を訴える

〈おばあちゃん劇団・ほのお〉

「残された人生を、ほのおの様に燃えつきたい。それがこの劇団名の由来でもあるのです」。大石さきさん率いる劇団ほのおは、六十代・七十代の女性ばかり十名からなるグループです。きっかけは、長く保健婦を務められた大石さんが、老人の居る家庭を訪問するうち、そのかかえる問題の大きさに気付き、これらを目で見る形で現わして強く世間に訴えたいと思つた事からでした。

これまでに、嫁姑問題、悪徳商法問題、老人の心の問題などを扱って好評を得、遠く県外からも公演依頼がきているそうです。シナリオも大石さん自身が手がけ、それぞれの経験を生かしたアドリブの面白さで演じていくのがこの劇団の持味といったところです。シルバーパーワーは、只今大きなほのおをあげて燃焼中と見受けました。

連絡先 藤枝市大洲二丁目一八の一

電話 〇五四六(35)〇五二四

代表者 大石さき

文字への熱望を代読して

〈かたりべの会〉

朗読点訳奉仕活動を始めて十二年、会員百八十名のこの会は、中央図書館の一室を活動の場に、録音図書作成・貸出・管理、施設訪問、個人の要望に応じた対面朗読などのプライベートサービス、など幅広い活動を行っています。朗読は正しい日本語・正確な表現が要求されるので、下調べ・試聴・校正が不可欠で、一冊の本を読むのに一年かかるそうですが、会員の熱意と利用者の感謝の声に支えられ、所蔵テープもすでに六千。加入希望者も多く、新しく朗読を始めた人のために一年間の入門講座を設けているとのこと。

「途中でやめる人がいないのがこの会の一の魅力。」と語る言葉に、人の役に立てる喜び、会員同士の強い連帯感を感じました。

連絡先 浜松市立中央図書館点字図書室

電話 〇五三四(56)〇二三四

代表者 坂本君枝



写真 中日新聞社提供

ユパーさんの富士日記

Little life in Japan

by Yupa Ito



日本に住んでから、早いものでもう五年になります。最初は氣候の違いや習慣の違いに戸惑いましたが、言葉が少しずつ判るにつれて違和感も薄れてきました。

最近では日本料理も習い始め、主人や周りの人たちに「うまい」と誉められるのを楽しみにしています。

子供たちも元気に育っています。日本にきた頃は、日本語がほとんど話せず心配でしたが、一年後にはお友だちもでき、言葉の面では逆に私を助けてくれます。近所の人たちもとても親切にしてくれるので不安はありません。

子供の教育には、人一倍気をつけていますが、何しろ難しいことが多く閉口します。日本の子供たちは本当に大変だなと思います。タイでも宿題はありますが、親が手伝う程ではありません。私の子供たちは私の事を理解してくれていますが、一番頭の痛い問題です。

幸い、二人の子供は共に学校が好きで、毎日元気よく通ってくれます。子供たちがもう少し大きくなり、学校の行事やお知らせを自分で理解してくれるようになれば、私の悩みも解消されるでしょう。

日本の女性はとても勤勉です。

朝から晩まで一生懸命働いている様です。特に驚くのは、パートタイマーに出掛ける人が多い事です。「日本は豊かな国」と思っておりましたが、タイで見える日本人女性とは違って、大勢の人が毎日働きに行きます。また、女性の多くはバイクの免許を持っていて、仕事や買い物に利用しています。タイでは女性のドライバークは少なく、ごく限られた富裕な家の人が乗る程度です(バイクでなく乗用車に)。

タイでは多くの男性がバイクを通勤用に利用しています。私ももう少し子供たちが大きくなったら、パートタイマーに出るつもりです。私の家庭と私自身のために。

日本の人たちは時間と規則をとっても大切にしていると感じます。そしてそれはとても良い事だと思っています。タイでは個人の自由と個性が強調されるため、全体の規律がとかく忘れられがちとなります。特に、交通ルールやゴミ捨て場などでそれが判ります。ただ日本人の中にも、ルールが守れない人が極くわずかですがいることは残念なことです。

日本には四季の変化があり、また私の住む富士市は、山、川、海があり、とても素晴らしい町です。



●私の妻

妻に対しては、いつも感謝の気持ちをお忘れなくしています。それが私の哲学であり責任であると信じているからです。陽気な反面、とても淋しがり屋の彼女を支えるのは、二人の子供たちと優しい御近所の方々です。率直で自分の意見をハッキリ述べる彼女ですが、子供たちも含めて割合理解を得られていると信じます。家族をとても大切にしている彼女は、毎週タイへの手紙も欠かしません。

日本に比べて自由な生活環境のタイで育った彼女が、いつまでも、タイの女性の持つ優しさと微笑を忘れずに、元気で明るい家庭をつくってくれることを祈ります。

伊藤裕次郎

また、氣候も比較的良い所だと聞かされています。(私は冬はとても寒い所だと思えますが…)。

これからも一生懸命日本を理解できる様に、努力していきたいと思えます。そして日本とタイの相互理解が一層深まる様に、できるだけの努力をしたいと思えます。

気まぐれ美術館

洲之内 徹

新潮社

人は、生きる証として何かを「創造」し自分の軌跡を残したいと思う。形あるものを残す芸術家は、尊敬と羨望の的であり、人々はそこに自分のおもいを重ね合わせてみたりする。

だが、生きてきて、本当に何かが「見える」ということも素晴らしいことではないだろうか。人間を人生を、美しいものを「見る」とはどういうことか、「気まぐれ美術館」の一見気まぐれなおしゃべりで洲之内さんが語ってくれるのは、そういうことだ。

洲之内徹、大正二年愛媛県松山市生まれ。昭和五年東京美術学校に入学して、昭和七年に退学。戦後、いくつかの仕事を始めたが失敗、三十三年に、戦友田村泰次郎の現代画廊に入社して、後、跡を継いで、昭和六十三年に亡くなるまで画廊を経営。画商のかたわら自分の好きな絵と、絵の向こう

にいる画家と、画家の人生を見つけた。

洲之内さんが見た「美しいものは、一枚の絵の姿をしてはいるが実は必死な人の生き様のようなものだ。」

「昔二十万円で買った中村蕨の自画像がいまは千八百万円もするのに、同じ名作でも林俊衛の少女像のほうは、二十年前もいまも同じ三万円」こんなことってありますか、といきまぐところには、「同じ名作」への不当な差別に対してばかりでなく、林俊衛という人間の人生へ寄せる洲之内さんの思いの熱さがある。

「松本竣介の風景画」を調べる「熱さ」もまたものすごい。「風景画の現場がどこかというようなことは、その作品の、作品としての価値にはたいして関係ない」とは言いながら、絵の中の場所、建物、角度、と画家の視線をたどるおもしろさは格別である。

「芸術新潮」に連載された「気まぐれ美術館」は、「帰りたい風景」(昭55)「セザンヌの塗り残し」(昭58)「人魚を見た人」(昭60)と続いて、「さらば気まぐれ美術館」(昭63)をもって、たぐいまれなおもしろい絵の話、は最後になってしまった。

●●●新刊紹介●●●



「仕事を語る女たち」(上) 村田幸子ほか
—NHKのラジオ番組「女性と仕事」から—
自分の可能性にひたすら挑戦する八十四人の働く女性たち。仕事にいきづまった時、生き方に迷いを感じた時、彼女たちの語りは、明日へ飛び立つエネルギーを、きつとあなたに与えてくれるはず。

かのう書房 上下各一、七〇〇円



「不惑の星座」 宮迫千鶴著
世間の耳目を集め、話題に事欠かなかった団塊の世代も不惑の年を迎える。従来通りの「古いタイプ」の大人とはひと味違った精神的成熟度の高い「大人像」を作者と探してみるのも楽しいのでは。

リクルート出版 一、二〇〇円



「女の勉強・生活術」 南和子著
—自分を磨いて「生きがい」を手に入れる方法—
いま、再勉強を始めたあなた、ライフスタイルを変えてみようと思案中のあなたに、しなやかに自分を磨き、可能性を広げて生きていくための具体的な方法をアドバイス。
三笠書房 九八〇円



「自立家族—個の時代のライフイメージ」
四方洋・渡辺まゆみ著
家族の中の個人化、社会の中の個人化が進む中、シングルズや単親ファミリーなどさまざまな家族のあり方の実例を紹介している。自分の生き方を決めするのは社会でなく、自分自身である。
有斐閣新書 六〇〇円



「男たちの非婚時代」 吉廣紀代子著
離婚・未婚様々なシングル男性が、自らの人生観女性観を語りまとめた一冊。これを読む限り、「男性の結婚難」よりむしろ「結婚選択時代」の到来を感じさせる。

三省堂 一、四〇〇円

煙草のけむり

毎年恒例、夏の里帰り。都合で今年も列車を利用した。ごった返す駅の中、人混みに不慣れな子どもたちは、はやくも人いきれで疲れた様子。暑いさ中になにもわざわざとも思ふのだが、それでもと、老親の喜ぶ顔を思い浮かべつつ、やはり車窓の人となる。

「禁煙車」と指定しなかったので、やがて隣席のあちらこちらから、白い煙がたつてくる。たちまち、ふだんはさほどデリケートにも思えぬ息子たちなのに、「お母さん、たばこのにおいがいやだ、気持ち悪いよ」と訴えだした。都会のよんだ空気には、むしろ懐しさを感じる母親とは異なり、空気の澄んだ地に居を構えたせいで、息子たちは空気の汚れに敏感である。

かわいい子には旅をさせよう!

初めてのアメリカ旅行。成田空港で顔を合わせたツアー参加者は、私たちの他にOL三人組と、生後七ヶ月の翼君を抱えた夫婦のたった八人。添乗員のいない自由な旅だ。

だがこの添乗員無し旅行は予想以上に大変だった。飛行機が一時間半遅れた為に乗継便に間に合わない!こんな時は総て自分で交渉して変更の手続きをしなければいけない。広いシアトルの空港で、初心者私たちはどこに行つてどうすればよいのか全くわからない。大手ツアーの団体客が早々に次の便で立ち去るのを横目に、私たちはすっかり途方に暮れてしまった。

こんな私たちの不安を和ませてくれたのが翼君である。彼は八時間も閉じこめられた機内

「嫌煙権」が市民権を得て、大分定着してきたと思える昨今だが、それでも、一列車にせいぜい二両の禁煙車がついているにすぎないこの力関係が逆転する日も、そう遠くはないようにも思えるのだが……

二泊三日の帰省を終えてもどつてくると、「やっぱ、家の空気が一番いいよ」と傍らで深呼吸する子どもたち。長じて、都会でくらししても、同じことを言うかしら、と、ふと荷を解く手を止めて思わず顔をのぞきこんだ。

(息子の将来を案じる母親)

ポプリ



ではおとなしく眠り、初めて見る異国の地では、すれ違いざまにあやしていく人々に、少しも

恐がることなくあどけない笑顔を

返す。アメリカ人も子供に格別の愛情を示し、大変親切に案内してくれた。子供は世界の宝とでもいうように、翼君を中心に笑顔の輪がどんどん広がっていく。私たちも翼君のおかげで、無事に旅を続けることができたようなものだ。

私の未来の子供にも、こうした経験をたくさんさせて、国際人に育ててみたい……と秘かに次の海外旅行を夢見るこの頃である。

(今度はヨーロッパがいい妻)

ある夏祭りの日に

娘がまだ幼稚園だった頃。

園の夏祭で、かき氷屋の前には長い行列ができた。氷をかき氷屋の蜜をかける人は園児の父親。長い行列の先頭の方は殺気だち押しあつている。ようやく娘の番が近づいて、私は氷屋の後から、彼女の買物姿を見る事にした。「メロン」と言つて娘は、引替券を差し出すところが娘の後にいた父兄が、背後から、「メロン二つ」と、どなった。娘に渡されるはずのかき氷は、彼女の頭をとり越えて、その父親に渡された。「メロン」と娘は券をより一層高く差し出す。が、その次の父親が「イチゴ」と叫ぶと、またしても彼女を無視し、「イチゴ」と叫ぶ。イチゴのひしゃくに手がかかったところで、私の怒りが爆発した。

「サチコ!何やってんの。あんたがのろまだから!」

親がそばにいたんだ。大人たちの表情に狼狽の様子が窺える。蜜をかける役の父親が、あわててメロンをかけて娘に差し出す。娘はと見ると、その眼に、みるみる涙をあふれさせている。しまった!娘は何も責められるべき事をしてはいない。多くの人の面前で、私にどなられるべきどんな理由があるのか。

「今度は娘の番です。私は毅然として、ただそう言えば良かったのだ。つき上げる感情をコントロールできないまま、私はそこに立っていた。」

(子を見て育つ母親)

— 63年度編集員紹介 —



齋藤 智世
(浜松市)

事情で仕事をやめ、鬱々としていた生活に飛び込んできた編集員募集の報。原稿用紙に向かうと生き生きとしてくる仕事大好き人間の私にとって編集会議は元気の素ドリンクです。

家を出て、編集会議に向かうバスの中。車窓に透かして見るものは、家庭の主婦から一人の女性へと移行していく自分の姿。この心地よい緊張感！今、胸の中でザワザワと風が起こり始めている。



高木 美鈴
(静岡市)



高林 雅代
(浜松市)

結婚して九ヶ月、周囲から「赤ちゃんは？」の声しきり。でもまだやりたい事が山ほどあります。このまま母親になる前に、「自分という人間」を見つけないのです。

久々に原稿用紙に向かう新鮮さ。まだ子育ての最中ながら、昔とったなんとやらを当て込んでみたけれど、日頃の不勉強で青息吐息。それでもなお、サビを落として再出発です。



山崎ひろみ
(富士市)

専業主婦の座は、居心地満点ながら、母としての立場となると複雑です。先輩として、娘に伝える「女性の生き方」をじっくり学び探す良い機会になりそうです。



齋藤 典子
(静岡市)

編集後記

☆思えば爽やかな薫風の頃に出会った新編集員の五人でした。今夏のぐずつきとは異なり、かなりホットな夏をすごし、秋たけなわの今、やっと「ねつとわあく」十三号が完成しました。

☆それにしても、きつい編集会議でした。まさに「産みの苦しみ」いえ、「拷問の編集会議」のつぶやきも……。額に汗して繰り返し編集会議、オーバータイムもしばしば。それでもなんとか納得のいくまでと粘り腰。婦人課のスタッフの皆さんも、じつと耐えるばかりで：お世話をかけました。

☆会議、取材を通して、女性をとりまく様々な状況が、少しずつ見えてきました。限られた誌面に、どう載せるか、何を捨てるか、言い尽くせないもどかしさ、力の不足を痛感します。そんな中から、「女性の時代」が名実共にそうであるためには、一人一人の意識の向上もさることながら、女性同士のネットワーク作りこそが重要と認識を新たにしていくところです。

☆さて、そんなこんなで十三号、出来はいいかなものでしょうか。次号十四号へ向けて、より充実し

御意見、御感想をお寄せ下さい。また、御希望の方には本誌をお送りいたしますので、左記まで御連絡下さい。一人でも多くの方には是非お読みいただけたらと願っています。

た誌面をとスタッフは燃えています。より多くの方々と共に、女性の問題を考えていきたいと思えます。

女性のための情報誌

「ねつとわあく」 13号

昭和63年10月

編集・発行 静岡県県民生活局
婦人課

〒420 静岡市追手町9番6号

☎ <0542> 21-2137

表紙デザイン

県浜松繊維工業試験場

小杉 思 主 世